生徒とのふれあい14

最初の教え子

谷内　純一

大学卒業後、私の最初の赴任校は高知農業高校でした。I君は三年生で私より五歳年少ですが、大変優秀な生徒で私は内心自分より大人だと感じていました。明るく話題も豊富で楽しく、文芸部部長で素敵な小説を書き、農業大好きの好青年でした。

東京農業大学生のときにアメリカ・カリフォルニア州に一年間留学しました。

夏のある日の午前、彼はトマト畑に見回りに行きました。暑くてのどの渇きを覚えた彼はトマトをひとつ取って食べました。夕方になっても彼が帰ってこないのでホームステイ先の家族がトマト畑に来てみると、彼が倒れていたのです。病院に運ばれ手当てを受けて命を取り留めました。

私が「なぜそんなことになったのかね」と尋ねると、「先生、アメリカの消毒なんて、ほうやくなもんですよ。農薬の希釈パーセンテージなんか、いいかげんです。高濃度の農薬のかかったトマトを食べたせいですよ。それで病院に入院したんですが、看護婦さんが超がつく美人でしてね。体は回復したんですが、看護婦さんに会いたい一心でまだ悪い悪いと入院を続けていました。看護婦さんがもう治っているはずだと言っても、いやまだまだと言っていましたが、とうとう追い出されてしまいました」と彼は笑っていました。

彼の力量・人物は多くの人の認めるところで、母校の校長になりました。校長時代、退職間際に、彼の直接の責任ではないのですが、重要公文書が紛失するという事件が発生し、彼は責任を取らされた形で退職しました。彼から来た退職挨拶のはがきには「夢も希望もない日々です」と気落ちした心情が書き連ねてありました。私は胸が詰まりました。それで「君の生徒に及ぼした感化は功績は消えるものではないよ、気を取り直しなさい」と激励のはがきをやりました。

彼の力量を無視できなかったのでしょう。彼は二年ほど後にはしかるべき職につき、すっかり元気になりました。

七十歳になったとき彼は叙勲しました。高知新聞紙上に彼の大きな写真入りのインタビュー記事が載りました。祝賀会があるはず、「案内がない」と私はいらいらしていました。ある日の高知新聞で彼の死亡広告を見つけたときには、あっと驚きました。癌だったと知りました。残念無念でした。

以前、窪川高校に行った時、若かった彼から苗木で貰った五月の「秋月」は毎年我が家の庭で花を咲かせているというのに…。

憲法への思い⑦

韓国原爆被爆者2世 金亨律（キムヒョンニル）さんのこと

東加代

2004年8月、幡多高校生ゼミナール「日韓共生の旅」で釜山を訪れた私は、ビキニ水爆実験に関する韓国初のシンポジウムに参加した。その時、韓国人被爆者2世の金亨律さんに初めて出会った。彼はシンポジウムで生い立ちや被爆者2世としての活動を語った。

彼の母親は、戦時中広島で暮らしていて5歳の時に被爆した。話を聞いて、私は韓国にも原爆被爆者2世がいることを初めて知った。

金亨律さんは、1970年7月に釜山で一卵性双生児として生まれた。一緒に生まれた弟は1歳半で肺炎のために亡くなった。彼も生後1週間で高熱を出した。小さな頃から身体が弱く手術や入退院を繰り返した。「先天性免疫グロブリン欠乏症」と診断され、呼吸器障害もあり肺の機能は70％以上が失われていた。

2001年になって病気の原因が放射能の影響だと知ることとなり、苦悩の末、2002年3月に韓国で初めて被爆者2世であることを世間に公表した。これをきっかけに、「韓国原爆2世患友会」を作り精力的に活動した。また、反核・人権を尊重する立場から韓国政府や日本政府に対して韓国被爆者の実態と生存権の保障を力強く訴え続けた。

2005年の夏、再び釜山を訪れた私は金亨律さんが急死したことを知った。その年の5月、東京で開かれた「日本の過去清算を求める国際会議」に参加し、「原爆被害者特別法」について発表した直後、体調を崩して亡くなったという。35年の余りにも短い生涯だった。一年前、懸命に語っていた姿が脳裏に浮かび、すぐには信じられなかった。

「살아야 합니다」（生（いのち）は続かねばならない）。

これは金亨律さんの遺志を継いだ人の言葉だ。彼は亡くなったけれど、願いを共にした人たちの中で生き続け、その思いはいまも繋がっている。

【参考文献】
「ともに学ぶー地域の朝鮮人問題に向き合う日韓高校生の学習・交流活動ー」幡多高校生ゼミナール編2008年
「被ばく者差別をこえて生きる　韓国原爆被害者2世　金亨律とともに」青柳純一編　訳・著　三一書房2014年
「韓国のヒロシマ　韓国に生きる被爆者は、いま」鈴木賢士　写真・文　高文研2008年